

# 学習者はいかに書くか

— K子の文章推敲過程 —

田中宏幸

## 一、はじめに

本稿は、一高校生(K子)の文章推敲過程を追跡することによって、「書くべき内容が、学習者の内面において、いかに形成され、組み立てられていくか」を探ろうとするものである。

一九九一(平成三)年七月、児童福祉施設と里親の手で育てられたK子は、「日本福祉大学の推薦入試を受けるので自己推薦論文の添削をしてほしい」と申し出てきた。その後、九回の推敲(添削指導五回を含む)を経て、九月末に、二千字余りの自己推薦論文「私にとってのボランティア活動」を書きあげた。K子は、さほど文章表現力の高い生徒であったが、この指導を経て見違えるほどの伸びを示した。K子は、この間のすべての草稿を保存しており、私の依頼に応じて快く提供してくれたので、その推敲過程をつぶさに検討することができる。

## 二、K子の論文作成過程の概略

七月中旬 添削指導の依頼に来たK子は、何を書いたらよいのか皆目見当がつかない状態であった。私は、「まずは、自分のボランティア体験と日本福祉大学を志望する理由を書いてくるように」というアドバイスを与えた。

八月五(一六)日 原稿Ⅰ(第一次草稿・二八〇〇字)を執筆。K子自身のコメントによれば、「何を書いているかわからないので、思いつくままに、内容よりも言葉に気を付けて書いた」ものである。七枚の原稿用紙には、ボランティア活動の紹介や思いついたフレーズが、整理されないうまに並べられている。その中には、児童福祉施設の子どもたちとの交流体験と感想も短く記されている。だが、この体験と感想は、原稿Ⅱ以降は削除されてしまう。

八月一七日 原稿Ⅱ(第一回提出原稿・二〇〇〇字)を執筆。原稿Ⅰとは大幅に順番を入れ替え、「はじめ—なか—おわり」程度には構成を考え始めている。だが、自分の

体験のどこに重点を置いて書けばよいのかが明らかになつていないので、依然として出来事の羅列と説明にとどまり、話もあちらこちらで脱線してしまっていた。

八月十九日 原稿Ⅱの添削指導を受けにくる。この時には、「自分の活動を日記風に書くのではなく、ボランティア活動によって、自分がどう変わってきたのかを中心に書くように」というアドバイスを与えた。

八月二十二―二十六日 原稿Ⅲ(第二次草稿1・二五八〇字)を執筆。これも思いつくままに書き綴ったものである。自分の考えや気持ちが表明されるようになってきたが、「何が言いたいのか、頭の中ではわかっているのに、なかなか書けない」(K子のメモ)状態が続いている。

八月二十九日 原稿Ⅳ(第二次草稿2・二二二〇字)を執筆。原稿Ⅲをもとに、構成を考え直している。

八月三十日 原稿Ⅴ(第二回提出原稿・二〇〇〇字)を執筆。原稿Ⅳにさらに手を加え、制限字数に納めることを心掛けている。原稿Ⅲから原稿Ⅴに進むにつれて、K子は、述べる体験を四つにしぼるようになってきた。このころのK子は、これまで以上に、ボランティア活動に戸惑いを覚えることが増えていた。障害者に好かれたいとばかり考えている自分の姿に気づき、自己と障害者との関わりについて真剣に悩んでいたようである。その反省が文章の質を高めることにつながっていったと言える。だが、文章表現としては、「書くことが多すぎて、あれもこれとも思ってい

るうちに主述が乱れてきて、わけがわからなくなり」(原稿Ⅴの欄外メモ)、読みづらいものになっていた。

九月二日 第二回添削指導。「自分を変えたボランティア活動の具体的な様子を詳しく描写し、さらに、その体験が自分をどう変えたかということに焦点をあてて書くように」というアドバイスを与えた。

九月七―八日 原稿Ⅵ(第三回提出原稿・二二二〇字)を執筆。部の活動内容の紹介は全体の30%程度の分量に減少し、中心となる体験の描写に50%近い分量が割かれるようになる。文章構成意識が明確となり、決定稿の骨組みとほぼ同じものができ上がった。文末表現も「だ・である」体を用いるようになった。その結果、文章が引き締まり、内容も深まりを見せるようになった。だが、体験に基づいて自己の福祉観を語る「結び」の部分では、相変わらず言葉が空回りし、尻すぼみの文章になっていた。

九月九日 第三回添削指導。言葉足らずの部分に補筆してやりながら、「結び」の物足りなさを指摘した。

九月十五日 原稿Ⅶ(第四次草稿・二四〇〇字)を執筆。K子は「結び」の表現に苦しみ、何度も書いては消し、時間をかけて考えていたが、結局書きあげられなかった。K子は、思い余って母(里親)に相談したようである。余白部には、母の字で、「今私が一番触れたくない私の生い立ち」という添え書きがなされている。

九月十六日 原稿Ⅷ(第四回提出原稿・一九八〇字)を

執筆。K子は、自分の生い立ちを書くことを決意した。だが、文章の「結び」はすっきりしたものになっていない。九月一八日 第四回添削指導。「結び」をもう一度考え直すように助言。

九月二二日 原稿IX（第五回提出原稿・二〇八〇字）を執筆。決定稿にほぼ近いものを書きあげるに至る。

九月二四日 第五回添削指導。これまでの努力に高い評価を与える。語句を一部訂正して清書するように指示。

九月二七日 原稿X（決定稿・二〇八〇字）を清書。

### 三、K子の自己推薦論文

こうして完成したK子の自己推薦論文の「草稿」(原稿I)と、決定稿「私にとってのボランティア活動」(原稿X)は、次のような文章である。

【草稿（原稿I）】（表記はすべて原文のまま。）

私は高校二年の時は水泳部に入っていました。水泳という競技は個人競技で、自分との格闘です。どうすればもっと速く泳ぐことができるか。そんなことばかり考えていました。だからそこには、他人を思いやるとか、協調性などという言葉は不要でした。小学校6年間やっていたせいか、中学になると、協調性という言葉なんて、人間が生きてゆく上で、必要ないと本当

に思っていた時もありました。

高校生になって、だんだんとまわりの人が、大人になってきて、いろいろとつき合ひもふえてくると、今までのようではやっていけなくなりました。水泳も、好きではありましたが、どうでもよくなって、一年の終りにやめました。そしてその翌日から、前々から考えていた、ボランティア部に入ることにしました。

障害者とはどんな人か、福祉とはどんなことか、わからなくていいと思っていました。ただ最初は、人とのつながりをもちたいと思ったのです。その中で自（以下、この文はとぎれている。）

点字に興味があったので、ペン・ボランティア部に入りました。点字をしながら、月に2回、独居老人への生活情報紙『すずめさんだより』を社協から発行しています。同年代の人が読むのではないので、字の大きさや内容を部員と話しながら、進めています。記事を選ぶのも紙間マヰを読んだり本を読まなければならなくなり、記事集めをして、知識が身につきました。

点字では、絵本が中心で、私は『おいしいのぼうけん』『こんこんさまにさしあげそうろう』と『わすれられないおくりもの』をうって、後の2冊は盲人の方に読んでもらい、感想もいただきました。わからなかったことや、点字のうち方なども教えてもらい勉強になりました。ペンボランティアでは、人と接することは、

少なかつたけれど、知識がふえたし、文章をまとめて書くことも、苦にならなくなりました。

ペンボランティアに入る前は、まだ、知らなかつたのですが、ブルーエコー同好会というのがあります。精薄児・者の集いが音楽を中心に活動していたのを、ボランティアとして参加させてもらっていました。部になり、私たちの学校が中心となって実施しています。私たちが手伝う以前には、福祉まつりなどの小コンサートに出演していたのですが、打ち解け合うのに時間を使い、出演までには、こぎつけませんでした。ぜひ出演したいと思っていたのですが、ブルーエコーは、そればかりでなくもっと広い活動をする事になりました。

一つは、障害者で、とくに軽度の方と、リズム体操リズム体操をしています。先生は、エアロビクスの教室を開いておられるのですが、次女が障害を持つ子で、その養護学校に行っている人なども参加してあせを流しています。

私たちでも、かなりしんどいのに、子供たちは、だいたいぶなのかな？といつも不安です。何回も行くうちにおどりもおぼえました。普段、体を動かすことの少ない私たちにとって、とてもよい機会にもなっています。

(二行あき)

その後に入ったのが、ブルーエコー部で、人と接する機会が多くなり、この部に入って私は、福祉に進もうと決めました。

活動内容は、音楽活動を中心とした、精薄者、自閉症の子たちの集りで部の名前の由来でもあります。そして、軽度の障害者と供にリズム体操、おもちゃライブラリーでの活動、研修会の時に知り合った人との車イスの会、施設での劇などで、その他に社協からの衣らいで、ふれあいハイキング、心身障害者スポーツ大会、青少年ボランティア交流会、はぐくみの旅などがあり、一年の時とは、がらりと変わって、人の交流があつて、一番成長したと実感できた時期でした。

その他に新聞などを見て応募したのが、人と土の大学、赤十字のトレーニングセンター、児童福祉施設の子との1日クルージング、私がボランティアをする上で一番解れたくないと思っていた児童施設の子たちとの交流交流でした。その要因は、私が施設育ちであることです。(3字空白)今の親に里子として委託されました。交流で施設の子を見ていると小さいころの、いこじいこじだった自分を見ているようでした。

数多くの体験をしてきたけれど、いくらやっても、ボランティアには限界があると思つたことがあります。それは、障害者と接して一緒に遊んであげても、技術がないので、いざとなつたら、専門の人によって

もらうしかない。ボランティアはそこで終りなんだと思いました。今だに私は障害者については、何もわからないし、福祉は人間を幸福にするのだらうけれど、深い意味はよくわからない。だから福祉をもっと勉強したいと思った。障害者だけでなく老人福祉や、児童福祉をもっといろいろ勉強してみたい。

(三行あき)

高校一年まで、他人と協調しようとしなかった私が、ボランティアをして変わったように日本福祉大学で勉強できれば、もっともっと今の自分にも考えつかないような大きなことができそうな気がします。

ペンボランティア部とブルーエコー部は、○年○月にくすのき賞を県からいただき、より一層がんばらうと、みんな話しています。

おもちゃ図書館に行った時、ある障害者を持った男の子が私の顔をじっとみて、『ばくなんでこんな体に産まれてきたんやろう』と言われたことがあります。私は一しゅんとまどってしまいました。笑って、「人間は何か一つは障害をもっていて、それが心であったり体であったりするの、よし君の場合はそれが、体であっただけ、心はだれよりも、きれいだから自信を持って」と、言ってあげました。

いろんな人と話す時に、本当に親しみの心とやさしさがあれば、どんな言葉でも、相手に通じるんだなあ、と、

この時知りました。それからよし君は、私の前ではけっしてそんなことを言わなくなりました。

(一行あき)

ボランティアをするようになって、私は、多くの人とかかわるようになりました。その人の中に悪い人はいませんでした。みんな社会をよくしていこうと考えている人ばかりでした。だけどそればかりではだめ、だれかが、悪い人をも良くしてあげなければ、と思っただ。体ではなく、心がよごれている人をきれいにすれば、もっと社会は幸福になると思う。そのためには、もっと専門的なことを勉強して、だれかのためにつくしたいと思っています。ただ勉強して専門家になるだけでなく、私自身も、心もすべて、弱者に対して、すべてを受けとめられるだけの人間になりたいと思う。高校を卒業して4年間、大学に入って、今以上にもっとボランティアもして行きたいし、勉強もして、信頼される人になれるために日本福祉大学に進みたい。

【決定稿 「私にとってのボランティア活動」】

(各段落冒頭の○数字は、引用者が施したものである。)

① 私は高校一年までずっと水泳をしていた。水泳は個人競技であり、自分との格闘だ。この世界では、協力性や思いやりは不要だった。そして、人間は一人でも生きていけると思っていた。だが学年が進むにつれ周りが大人になって、付き合っても増えてきた。これでは私自身が偏った人間になってしまうと思い、前から興味があったボランティア部に入った。

② 私達の学校は、他校に比べるとボランティア活動が活発である。生徒会活動として、ペンボランティア部とブルーエコー部という二つの部が活動している。

③ ペンボランティア部では月二回、独居老人への生活情報紙「すずめさんだより」を発行している。先輩の方が読まれるので字の大きさには注意している。B4一枚の情報紙だが、仕上げるのに時間がかかり、根気のいる活動だ。老人ホームから花見に呼ばれた時には、「この方達が、『すずめさん』を書いておられます。」と紹介され、おじいさん、おばあさん一人一人から、「○○の記事が役に立っています。」と言われたりした。それが自分の書いた記事だと、とても嬉しく、次はどんな記事にしようかと意欲をかきたてられた。

④ ペンボランティアでは点訳もしている。私は、「おしいれのぼうけん」、「こんこんさまにさしあげそうろう」、「わすれられないおくりもの」の三冊しかまだ打てていない。後の二冊は、盲人の方に読んでもらい感想もいただいた。卒業までに、もう一冊ぐらい打って読んでもらいたいと思っている。

⑤ ブルーエコーは、精神薄弱の方が音楽を中心に活動していたのが名前の由来だ。今では私達が介護の中心になり、子ども達とゲームをしたり、ハイキングに行ったりもしている。他に、いろいろな障害者を持つ子ども達との「おもちゃルーム」での活動をはじめ、福祉協議会から依頼された活動など、幅広い活動をしている。

⑥ 私がボランティア活動を始めた頃は、子ども達がどうしてこんなに明るくふるまえるのか不思議だった。そんな子ども達に見詰められると、どんな顔をして良いのかわからなかった。誰かに聞くわけにもいかず、とまどってばかりいた。友達の様子を見ると、みんな笑っていた。こうすればいいのかと知り、笑ってみると自分自身も嬉しくなった。

⑦ ある日、私がおもちゃルームに行った時のことだ。肢体不自由のよし君が、私の顔をちらっと見て、まるで独り言のように言った。「僕、なんでこんな体になっただんやろなあ。」私はドキッと、のどの辺

りで息が詰まった感じだった。数分間、何も言えず、よし君の顔を見ているだけだった。しばらく考えて、「たぶんね、人間は何か一つは障害を持っていて、それが心だったり、体だったりするの。よし君はそれが体だったの。心は誰よりもきれいだから自信を持って。」と言うのが精一杯だった。

⑧ 残念なこともあった。重度のゆかちゃんと接した時のことだ。私が何を言っても反応してくれないのに、ゆかちゃんの先生が一言声を掛けるだけで、ゆかちゃんはこのこと笑うのだ。私は少し先生に嫉妬した。そして、どうにもできない自分が惨めだった。

⑨ また、三十歳ぐらいの人と接した時のことだ。その施設の先生に、「この子はあなたより年上だから、自分の事を言う時は『お姉ちゃん』と言わず『私』と言って下さい。」と言われた。私は、今までの自分の態度が恥ずかしくなった。ある新聞に、「体の不自由な人を見ると気の毒だと思う。でもそれは相手を対等な人間として見ていない証拠で、思いつかりかもしれない。」という文があった。同情するだけでなく、こだわりなく行動できるようになりたいと思った。

⑩ 私は、ボランティアという言葉は嫌いだ。日本では自分の得にならない行為の代名詞として使われ、私達のことを偽善者だと見なす人が多い。活動をしたこともないのに、真面目すぎるとか、暗いとかいう変

な先人観を持っている。

⑪ だが、私にとってのボランティア活動は、活動を通じて、色々な人と出会い、つながることであり、私自身の人間性を高める場なのだ。しんどい、面倒くさいと思ったこともある。でもそれ以上に、喜び、感動、感激がいっぱいある場なのだ。

⑫ 福祉とは人間の底に流れる広大な幸福への追求だ。だから、人間が幸福を求めて生きる限り、なくなるものではない。私がそんな福祉に引かれたのは、私は生まれてすぐ産みの親に捨てられたからかもしれない。だが今の親には、他の子よりも大切にされ幸福に育ってきた。今となれば、その事が、私の物の見方、考え方に大きな影響を与えているように思う。私はこれまで、人に対して思いやる心を人一倍はぐくんでもらったようだ。そして、これからは、その心を障害を持った人、社会的に弱い立場の人達に、何らかの形で分けてあげたいと思う。

#### 四、決定稿の分析

十二の形式段落からなる決定稿は、内容的には次のような四段落構成になっている。

- 一、入部の動機と活動内容の紹介（段落①～⑤）
- 二、ボランティア活動の実際（段落⑥～⑨）
  - 1 初期のとまどい
  - 2 よし君との出会い
  - 3 ゆかちゃんとの出会い
  - 4 年上の障害者との出会い
- 三、私のボランティア観（段落⑩～⑪）
- 四、私の生い立ちと決意（段落⑫）

この文章は、内容、表現双方から次のような特徴を指摘することができる。

##### ① 視点の確かさ

福祉を志すものとしての原点が明確に語られており、自身のボランティア体験の捉え方に確かさが感じられる。しかも、抑制された文体で生育歴が書き込まれたことによつて、自己認識力の深さと福祉にかける思いがよく伝わってくるものになっている。

##### ② 文の歯切れのよさ

無駄な表現が削られ、短いセンテンスでまとめられているので、簡潔で読みやすい。

##### ③ 文末表現の工夫

体験を述べる際は、助動詞「た」を多用したテンポのよい文体を用いている。考察を述べる際は、文末表現に変化を持たせることによつて単調化を防いでいる。

##### ④ 文章構成の整序性

段落構成がよく整っているので、体験を積むごとに筆者が成長してゆく過程がよくわかる。長さの点でも各段落が適度なバランスを保っている。

##### ⑤ 会話表現を効果的に用いた描写力

会話表現が臨場感を生み、その場での筆者の戸惑いや衝撃の強さを伝えている。

##### ⑥ 用語の適切さ

体験の総括や自分の福祉観については、いたずらに背伸びした観念語を多用することなく、体験に裏打ちされた言葉でまとめている。そのために、K子の誠実な人柄がより強く印象づけられるものとなっている。

#### 五、文章推敲過程の分析

##### (一) 推敲過程の区分

K子の文章推敲過程は、第一回・第二回・第三回・第五回の添削指導を節目として、次の四期に区分できる。

（第四回添削指導では大きな変化がなかった。）

第一期 【原稿Ⅰ～Ⅱ】 内容模索期

第二期 【原稿Ⅲ～Ⅴ】 段落構成模索期

第三期 【原稿Ⅴ～Ⅵ】 主題再構築期

第四期 【原稿Ⅶ～Ⅸ】 結論模索期

第一期は、主題が明確にならないまま、混沌とした自己を見つめ、何を書くかを模索していた時期である。

第二期は、中心に据える四つの体験が明らかとなり、段落構成を考えながら、一応まとまりのある文章に仕上げようとしていた時期である。

第三期は、四つの体験に共通するものは何かを改めて考え直し、主題が何であったかを再構築し直していった時期である。

第四期は、自らの生い立ちを書くことに対する抵抗感と闘いながら、文章をいかに結ぶかに苦しんだ時期である。

この時期のK子を支えたのは、前担任のO先生とK子の里親である。「こんな文章の終わり方でいいの？ 本当のことを書かなきゃ。」と叱咤激励され、K子は体験と考察とが結束した自己推薦論文を完成させることができた。

## (二) 表現技術の変化

節目となる四つの原稿について、第Ⅶ段落（よし君との出会い）に焦点をあてて比較検討すると、表現技術に次のような変化が見出される。（資料参照）

### ① センテンスの長さの変化

一段落の字数はいずれも二二〇字余りで大きな変化はな

いが、一文あたりの平均字数は、原稿Ⅱの七四字に対し、原稿Ⅴ以降は約四〇字と短くなっている。とりわけ、原稿Ⅸでは、それまで一文にまとめていた状況説明を三文に分け、短文を連続させたことによって描写性が強くなっている。また、会話表現を文として独立させたことにより、臨場感が生まれている。

### ② 文末表現の変化

文末表現は、原稿Ⅵ以降は常体に統一され、「た」「た」止めが多用されるようになった。その結果、事実が簡潔に伝わるようになった。

### ③ 接続詞、指示語の削除

原稿Ⅴ・Ⅵに見られた「そして」「それ以来」などの冗長な接続語や指示語が、原稿Ⅸでは用いられなくなった。

### ④ 理由説明文の削除

原稿Ⅴ・Ⅵの「よし君はずっと悩んでいたんだと考えると、すぐに答えられないと思ったのです。」という理由説明の文が、原稿Ⅸでは削除された。

### ⑤ 文脈の乱れの修正

主述の対応関係の乱れ（よし君が：聞かれた）が、原稿Ⅱ・Ⅴでは見られたが、原稿Ⅵでは改められた。一方原稿Ⅵでは、「そして笑って：なぐさめの言葉しか出なかった」という修飾語・被修飾語の対応関係の乱れが新たに生じている。「言ってあげる」という不適切な表現にこだわっているうちに、先に書いた「笑って」という修飾語

を忘れてしまったのである。

## ⑥ 比喩表現の使用

原稿Ⅹに至って、比喩表現が効果的に使用されるようになった。「まるで独り言のように」のどの辺りで息が詰まった感じ」等、目新しい表現ではないが、ここではその場の様子を印象的に伝えることに役立つている。

## ⑦ 段落の位置づけの自覚

原稿Ⅵまでは、「よし君はそれ以来、私の前では、そんなことは言わなくなりました。」というよし君の変化を描写した文で段落を締めくくっていたが、原稿Ⅹに至って削除された。「自分の未熟さ」を語る段落として位置づけるには不要の一文だと気がついたからである。これは、原稿Ⅵにおいて、「言ってあげる」を「なぐさめの言葉しか出なかった」と改めた時点で気づきかけていたが、「精一杯だった」と改めたことによって、より明確になった。

## 六、学びえたもの

K子に対する添削指導とK子の文章推敲過程の分析を通して、次のようなことを学び取ることができる。

### ① 「主題」のしぼり方指導の必要性

単なる生活作文ではない内実のある論理的な文章に導くには、主題のしぼり方を意識的に指導する必要がある。とりわけ「自己」を語る」等の対自的テーマについて書く際に

は、次の三点に留意させる必要があるろう。

ア 何かと出合い、変容（あるいは新たな発見を）した自己を書く。

イ 異なる複数のできごと（あるいは体験）を取り上げ、その共通点と相違点を見いだす。

ウ 体験を通じて学んだことは何かを明らかにする。

### ② 「構想力」の指導の必要性

どの順に述べるかという程度の文章構成力でなく、何のための段落（あるいは文）であるかということを見ることが「構想力」を身につけさせる必要がある。とりわけ、二〇〇字程度ならばまとまりのある文章が書けるのに、数ブロックを組み立てていくとなるとうまくまとめられないという生徒の場合、アウトラインを書いておくという程度の指導では不十分である。内発的な「想」をいかに自覚させるか。その指導法の開発が急がれる。

K子の場合も、「よし君との出合い」の最後の一文が不要だということになかなか気付かなかった。主題を明確にし、全体をどのように進めようとしているのかを見通す力を育てなければ、文章表現力は向上しない。

### ③ 「確かな受け手」としての教師の必要性

K子の自己推薦論文の内実を高めている重要な要素として、「体験の豊かさ」と「K子の生い立ち」を挙げる事ができる。問題は、その「豊かな体験」をどのような視点から捉えるかということである。今回は添削段階での対話

が、視点の明確化に大きな役割を果たした。

「K子の生い立ち」も、相互の信頼関係が成立していないければ文字化されることはなかった。まだ形になっていない子どものメッセージを、敏感にまた確実に受けとめ、さらに問い返していく「確かな受け手」として、私たちは子どもと対峙できているかどうか。国語教師には何より欠かさない資質なのではないかと考える。

## 七、おわりに

K子の文章推敲過程は、決して特殊な事例ではあるまい。こうした事例分析を積み重ねていくことが、一斉授業における作文指導を充実させていくことにつながるのである。

個を重視し、個に即した指導法を開発してゆくためにも、これからも次の五点に留意しながら、実践研究の深化を図りたい。

- ① 問題意識の喚起、熟成に力を注ぐ。
- ② 内発的な「想」の流れを重視し、生徒自らが自分の主題を発見できるように導く。
- ③ 生徒の能力に応じた、文章構成や書き出しモデルを用意し、書くことへの抵抗感を軽減する。
- ④ 添削指導における対話を重視する。

- ⑤ 充実感、達成感を味わわせ、新たな表現意欲を喚起できる処理方法・評価方法を開発する。

(兵庫県立加古川南高等学校)